

カラムシの品種

●近年のカラムシ研究

カラムシ(*Boehmeria nivea* var. *nipponnivea*)はイラクサ科(Urticaceae)の多年草植物である。広くアジアに自生しているが、品種も多く植物学的な研究事例は多くはない。日本における牧野富太郎の植物学の書籍や図鑑などでもアサ(大麻)の製織作業の一技法である煮る・蒸すを「茎蒸(カラムシ)の語源と誤認し、混同し記載している。こうした基準書の誤りをいまだ正



カラムシの草姿(写真:小松政一、以下*はすべて)

さず、現在多くのインターネット辞書などではこうした植物事典などからの引用が多いため、正しくカラムシを理解している人が少ない。

事典類の記載内容が正しいのか精査し、考えて引用しなければならぬ。

本書では不確かな情報はできるだけ記載しない。そのため植物としてのカラムシにつ

いては今後の調査研究・分類を待ちたい(以後、植物はカタカナで「カラムシ」、手工芸繊維などのものはひらがなで「からむし」と表記する)。中国語表記でカラムシは「芋麻ちよま」である。「芋」をからむしと読む場合もある。

近年、植物考古学分野で人間が利用した植物の来歴の見直しが行なわれている。とくに千葉県佐倉市の国立歴史民俗博物館の共同研究で人間が使用した植物由来のウルシ、アサなどの出土物の科学分析・再検定で来歴見直しを進めている。縄類の素材は樹皮のカバノキ属、あるいは植物のリヨウメンシダであることが多数確認された。これは、新しい発見であり、従来の認識は大きな転換が求められている。

最古とされたアサやカラムシの縄類についても最新の分析では、たとえば青森県板柳町の土井1号遺跡から出土した朱漆塗り紐を分析した結果は、カラムシの可能性が高いとしたが確定には至っていない。花粉分析ではカラムシが確認されているが縄類の確認は少ない。

●形状

カラムシ(苧麻)の野生種は田の縁や道端などに雑草として生え、地下茎を伸ばして群生する。そして、1~2mに成長し、丸みを帯びた葉をつける。この植物の幹(茎)から得られる繊維は、「芋」「紵」「青芋」「真芋」などと呼ばれ、『魏志倭人伝』にみられ

る「細芋」はカラムシである。

●分類

【花城良廣氏のカラムシの分類】

2001年当時、沖縄県にある海洋博記念公園の熱帯・亜熱帯都市緑化植物園に在籍していた花城良廣氏は、カラムシの植物分類については研究成果が少なく、今でも行な



群生するカラムシ*

われていないこと、学術的に整理されたものがないことを強調された。また沖縄県内の八重山群島・宮古諸島と台湾のカラムシの関係や、台湾台中の農業試験場に戦前の日本産カラムシ品種が集められ保存されていることなどを教えられた。

とくにいま必要なのは、カラムシ品種を多数、まず保存し、当面利用すべき品種と、そうではない品種を分け、遺伝資源としてすべてを保存することが必要である、としている。

花城氏の植物としての分類では、大要以下のようにまとめられる。イラクサ科カラムシの基本種は、中国南部に自生しているナンバンカラムシ(*Boehmeria nivea* ボヘミアニベア)で、染色体は2n(複相世代)であろう。この基本種から多くの変種が

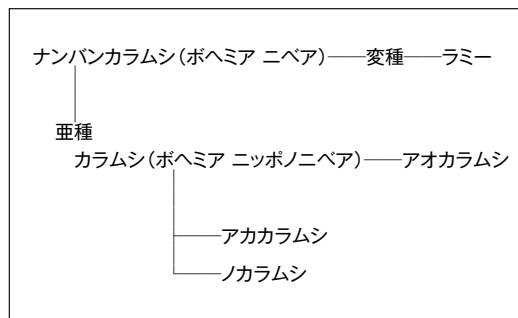
生まれ、染色体が倍加したラミーができ、東南アジアで広く栽培されるようになったと考えられる(基本種を2種とする研究者もいる)。中国南部ではイラクサ科で最もカラムシに近いヤブマオを含めて50~60種類ある。

次にナンバンカラムシの亜種(サブスピーシス)には、日本に分布するものとしてカラムシ(*Boehmeria nipponnivea* ボヘミアニツポノニベア)がある。日本がユーラシア大陸(中国)と陸続きであった時代には、ナンバンカラムシが分布していたが、今では独自の種に分化したと考えられる。このカラムシを中心として多くの変種がみられ、それがアオカラムシ、アカカラムシ、ノカラムシ(昭和村では葉裏白のカラムシをノカラムシと呼ぶがそれとは別)と呼ばれる種と考えられる(図1)。

一般に栽培されるものは野生種よりもひとまわり大きな形態をしているため、染色体は3倍体か4倍体に変化していると思われる。3倍体は交配しても種子ができない。あるいは種子ができて発芽しない。

基本種のナンバンカラムシの2倍体、あるいは4倍体を探せ

図1 宮古島のカラムシ分類(花城良廣による)



写真図解 糸づくり(糸績み)

●糸づくり(糸績み)

カラムシ、アサの糸づくりはほぼ同じである。まず、繊維を細かく裂く。繊維の長さは素材の茎の長さに制限されるので、始めに1本ずつ撚りつなげ、苧桶に貯める。これを苧績みという。

次に、湿り気を与えながら紡錘で撚りをかけ、紡錘に巻き取る(撚りかけ)。糸が一杯になると、杵に巻き上げる。杵は、糸を乾燥させて撚りを安定させるとともに、糸の分量を計るための道具である(総上げ)。杵から外すと、糸が幾重にも輪状に束ねられた総糸ができていく。



図1 右撚り(S撚り)と左撚り(Z撚り)

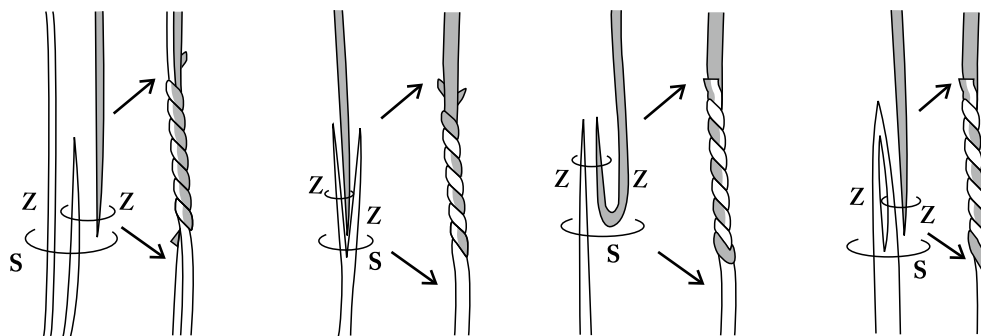
昭和村からむし織後継者育成事業実行委員会「ハタの油」(2004年)を参考に作成

糸の撚り方法については、JISの繊維用語ではS撚り、Z撚りがあり、ISO(国際標準化機構)にも記載されている。日本古来の「右撚り」は、右回りに

撚りをかけることで、英語表現では「左撚り」のことであり、糸目からみるJIS用語では「S撚り」と定義される。日本古来の「左撚り」は、左回りに撚りをかけることで、英語表現では「右撚り」のことであり、糸目からみるJIS用語の「Z撚り」と定義される。

日本や周辺諸国における植物性繊維の製糸法を概観すると、糸を績む方法は、図2にみるように、大きく4通りあり、原則としてZ字方向の下撚りに、S字方向の上撚りをかける。このうち「2本揃え」の方法は、裂いた繊維2本を平行に揃え、短い方の

図2 麻糸の績み技法(東村純子「弥生・古墳時代における麻布の製作技術」2013年より)



繊維の端に次の新しい繊維の端を撚りついでいく。2本の繊維で1本の糸を構成するため、他の方法と比べて糸の太さのばらつきを最小限に抑えることができ、機に掛けたときの張力に強い利点がある。現在、日本各地のカラムシ産地で行なわれている糸績みの技法については経糸、緯糸の繊維のつなぎ方には多様性がある。経糸は強い張力がかかるのでとくに念入りなつなぎ方をしている。

●昭和村の場合

昭和村での一般的なアサ(を)の糸績みの技法を以下に述べる。これが基本となりカラムシの糸績みとなっている。

【糸績みの手順】

カラムシ繊維にはモトとウラがある。根元の方をモト(根元、アタマともいう)、茎の先端部の方をウラ(末、スエ)と呼んでいる。

- ①カラムシ繊維のモト(根元、アタマ)をブラシで細かく裂く(1、2)。
②束になったカラムシを小束に分ける。産地により形状が異なり、直接必要分を手に巻き取る「手がらみ」とするところもある(3)。

